

《4月例会報告》

## 実践する認識論 看護学校の先生たちの 熱い思い

### 巻頭報告

#### 庄司先生、 楠田さんに熱く語る

看護学校の方たちの自己紹介のあと司会の尾崎さんが、庄司先生に感想はどうですかと振った。そこまでのやりとりを聞いて庄司先生の制度論が始まった。

みんなが右にならえで整然と行動するマニュアルのことを庄司先生は、「制度」と言い換えた。教育の場合文部省がその発信の大本だ。先生は、旧師範学校出身の教育者の一人斉藤喜博などの制度的実践を比較し、自らが授業や仕事を一つの型として構築することが大切だと語った。

楠田さんは退職した中学校の理科教師だが、エネルギーだ。そこで庄司先生は、久しぶりに理科教育を熱く語った。

まず楠田さんが、『野草雑記』など自然科学の学びが常民の中にあつたことを掘り起こした柳田國男にアプローチしたことに好感もたれた。そして「常民の科学」というくくりで、自然の中の「聞きなし」などにも楠田さんの研究範囲が広がっていて楠田さんの「常民の科学」研究は進んでいる、と賞賛された。

楠田さんのレジュメの内容を受け、理

科教育の本質は「予想」にある、と庄司先生の話聞いてあらためて納得。教師が指導をするときに予測（予想）しないで進むとことではない、誰もが無意識にでも予想を立てている、それを意識することで論理が積み上がってくるのだという。

庄司先生の経験では、成城学園での仮説の学習では、テキストづくりがうまくいかなかった。それは、テキストに成功・失敗の基準を示さなかったからだという。成功・失敗という結果を見ることはとても重要なことなのだ。（この国の失敗もそこにある気がする。）

さらに子供たちに話す、語るという姿勢が重要なのだ。子供たちはお話を聞きたがっている、それは理解する上で「具体」を求めていることにほかならない。また、語りは生活目線でもあるのだ。

予想・仮説は日々の我々の思考の営みでもある。そのことを意識するだけで、成功失敗にいたる筋道が決まってくるように感じられた。（徳永）

### 「らしさ」をおりる

看護学校の先生たちを迎えて

植垣一彦

4月13日の例会は、大勢の参加者でにぎわった。いつものメンバーに加えて、神奈川や静岡、茨城の地で、この4月から新しく看護学校の教員になった十名のみなさん（お子さんもひとり）と、介護教員5年目の滝北利彦さんの参加があったからだ。いずれも植垣の「認識論」講義が縁で出会った方々（滝北さんは横浜でおこなっている介護実践教育研究会の主軸メンバー。植垣も毎回参加させていただいている）。植垣の講義のテキストはむろん庄司和晃著『認識の三段階連関理論 増補版』（季節社）。

そこで、植垣が師と仰ぐ庄司和晃先生にぜひ一度会ってみたい、というみなさんの熱望が実現した次第だ。

会が始まるまでは、さながら庄司先生のサイン会。テキストを手に長い列ができた（先生、快く応じていただきありがとうございました）。いつにない新鮮な来客を、古参メンバー？は温かく迎えてくれた。なかでも、会の進行役の尾崎さんは、予定していた「年報合評会」を急ぎょ変更し、みなさんの自己紹介と心境を語ってもらうことから会を始めてくれた（尾崎さんに、感謝）。

多くは看護教員としてスタートした決意と、入り交じる不安が語られた。一方で、「教員らしさ」を求められることへの異和や、「個性」を嫌う「学校」の雰囲気に対する座り心地の悪さも語られた。そこで、各メンバーも自己紹介を兼ねて、強いられる「らしさ」をどう考えたらよいか、述べることになった。

「らしさ」は制度ですよ一向井吉人さんのこのひと言で、メンバーのアドバイスが方向づけられた。「自分らしさ」の希薄ぶりを逆照射し、「教員」というあいまいな「制度」に逃げ込む節操のなさを向井さんは指摘した。おそらく彼はこ

のとき、「学校」や「教員」という「共同幻想」が夏の雨雲のように「個」を覆い、逆立してくるという原理を意識していたにちがいない…ですよね、向井さん！

「制度」をどうやり過ごすか。

終始、若いメンバーの議論に耳を傾けていらした庄司先生の、締めのアドバイスを要約するところだ。

悠然と（コッソリと、と読むのが庄司流）自分らしさを表現し、子どもや学生の魂に届く授業を真におこなうことが、「制度」に拮抗する唯一の方途ですよ、と（でよろしいでしょうか？先生）。

なお、滝北さんからは、「手づくり介護用品」の授業実践レポートがあった。「認識の三段階連関理論」を駆使した授業構成で、彼の「情」と「愛」に溢れる「認識」が、「表現としての介護」に結実したすばらしい報告だった。

帰路、みなさんが口々に語った感想。メンバーの真剣さと優しさ、庄司先生の風格やお人柄に感動しました、とのことでした。（2013/5.23）

#### ●当日の庄司先生の予定メニューレジュメ

- ・「絵解きコトワザ」の教育実験
- ・ポラリス看護学校一年生との絵解きコトワザ
- ・社保看一年生との絵コトワザ

## 紙上 年報報告会

上記のように看護学校の皆さんが大勢見えたので「全面研年報」の合評会はお預けとなりました。そこで、ここでは今回原稿をお寄せ下さった方々の原稿紹介文を到着順に掲載します。

今井 誠

## 「人間にとって精神とは何か（1）」

A：『人間にとって精神とは何か』は、〈頭の中〉に存在している。そこに論理的法則が作用している〈認識〉と、〈腹の中〉に存在して心理学的法則が作用している〈心〉との統一が人間精神の本質であると説いたものです。これは、別ないうと〈主観〉の本質を説いているということです。私たち人間は、この〈主観〉において自分デ自分ノ命ヲ運ンデイル→〈前途〉＝〈未来＝⑫〉に向かって歩んでいると私は捉えています。

B：以上のAを媒介して、自分ノ命が運バレテイル客観の本質を解明するという〈課題〉に取り組んでいます。私達は、この面では、〈前途〉＝〈将来⑬〉を体現するのダ、というのが私の考えです。

〈前途〉は〈主観〉における〈未来〉と〈客観〉における〈将来〉との統一であるという方向で運命トハ何か？の〈謎解き〉の〈仕事〉をコツコツやっています。これは、私の立場からの〈教育の本質と渡世法体得〉論の実践ですね。

今澤 正史

### 「活動は修行なり」

◎「活動は皆修行なり」

ある物やことが完成されたイメージを喜びとしてそれを目指してその労働をする。その労働の過程の努力には苦がつきものである。楽も苦も弁証法でその統一が真理で楽と苦は相互に入れ換わる。

◎「幸せのおすそわけ」

自分が楽しいもの、ことをつくれれば、それを受け取る相手もうれしがるという道理。しかしそれも弁証法で条件があり、その方面が好きな人が受け取らなければならない。たとえば自分が花を育てるの

が好きならば花の好きな人に限りプレゼントすれば喜ばれるという事。

◎「現場主義」

本テレビパソコン等は現実のふれ合いの為の手段としっかり自覚してそれらのメディアを楽しみたい。

◎「海・山・都会」

海・山・都会等たまにありつけるものにそれぞれの特徴の良さでのありがたみがある。これがぜいたくというものだ。たとえば年柄年中ごちそうばかり食べているとそのごちそうがふつうとなり何の感動も得られない。そして、これも弁証法「量から質への転換」である。

長谷川 孝

### ＜教育＞と〇〇教育や訓練との違いを考えたい

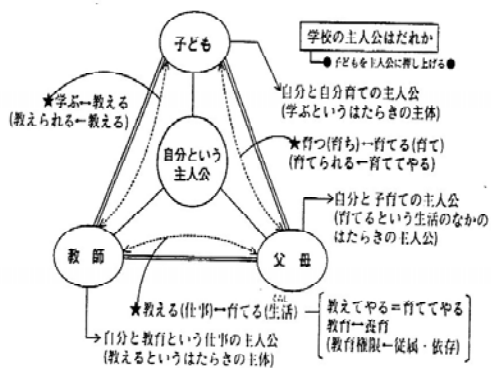
— 自分の主人公としての＜自己＞を育てる営み —

『久しぶりに、私の近況をお知らせしようと思ったら、「いじめ」関連と高齢者大学のまとめ誌に書いたものくらいしかなくて。それらと併行して、ずっと考えていた、学びや気付きや遊びなどの三段階…そのメモを整理してみたのですが、いろいろな私自身の思考にも絡んでいることに気づきました。年報に原稿を出した後、修正版を作って補筆としてはさみ、さらに修正版を作りました。

そこでの反省は、▶三段階連環という考えを、やたらナマかじりでマネをしてはいけないこと▶自分で考え続けてきた三層図(三角形連環図)との使い分けを明確にすべきこと▶(三層)連環図には、適用すべきものと適用がふさわしくないものがあり、また例えば学びそのものの三層(三段階)と、学びを一層(段階)に含む三層(段階)があること…などなど。考え

させられています。「いじめ」問題も考  
える際に、人権や自治の三層の考えが土  
台にあります。』

### 言ひなれば、図解マングラカ



◎子ども・父母・教師がともに、自分の主人公として活動し影響し合うなかで子どもを主人公として押し上げていくかわり。

図3 学校教育の主人公三相図

### 長谷川孝弘の「三相図」。

論文「教育を叩き出した」例の思いと論理」。

『74-74 教育と文化』9号, P.43

1997.11.30 第17巻教育センター。

向井 吉人

## 「ことば遊びコレクション '1 2」

ことば遊びの教室実践を進めながら、  
一方で出版される書籍への関心を持続し  
てきました。『素敵にことば遊び』の出版  
以前から、書いていた書評のような文章  
は、ガリ版印刷で冊子にしていました。

「年報」は、1993年版からの発行  
で今年で20年、20冊目の発行になり  
ました。わたしの「コレクション」の連  
載は、その年のことば遊びに関する出版  
次第、いわばなりゆき任せなのですが、  
欠かさず連載できました。毎年10冊は

紹介・批評できたのですから、〈ことば  
遊び〉が一つの文芸のジャンルとして存  
在感を持っているといえましょう。

10年分をまとめた冊子を2003年  
にこしらえましたが、再びの10年です  
から、当然冊子づくりは、数年前からの  
念願であり、もくろみでした。ぜひ10  
年分のコレクションをお楽しみ下さい。

篠原 賢朗

## 「宗教教育への道」

### 宗教教育への道

#### 「仏像づくりの教育 その1、2」

##### 1. 非科学の教育～目途～

- (1) 人間文化としての知恵に学ぶ
- (2) 非科学をたっぷり味わう
- (3) 神秘への理解、楽しみ方を学ぶ

##### 2. 創作「仏像」

- (1) 千手観音の絵を使って、自己紹介の持ち物を書こう。
- (2) 自分が千手観音だったら、千本の手でどんなことがしたいかな。

自分が千手観音だったら、千個の眼で何が見えるかな。

##### 3. 仏像づくり その1、その2を通して

- (1) 人間の有限性を突破し、非科学の世界へ、よりより認識を拡大することができた。
- (2) 千手観音の持ち物は自己紹介のための物だという観念から、仏像の持ち物を使って自己紹介をさせることで、考えて書く楽しさを味わうことができた。
- (3) 千手観音だけを書いたワークシートに記入していく方法の有効性を確認した。
- (4) 仏像との縁結びの一つとして。
- (5) そして千手観音の底にあるもの…人間の創造性の一面にもタッチ。

山田 学

「庄司和晃・未来教育・一  
学徒」

「庄司和晃・未来教育・一学徒」

本稿は、昨年10月より全面研例会参加しているわたくし山田の、庄司先生や諸先輩へのごあいさつ文です。

高校生で三浦つとむにほれたばかりに、とても個性的な人生に追い込まれてゐる、わたくしの紹介です。

2ページで短いですが、そのままお読み下さい。

植垣一彦

「庄司和晃と吉本隆明」

～対話の交差点メモ～

例会でレポートしたものに、「まえがき」と「あとがき」を付けて掲載した。なお副題の「対話の交差点メモ」の「メモ」はなくてもよい、とのご意見を庄司先生からいただいた。「まえがき」と「あとがき」があることで、「メモ」（覚え書き）の域を脱して自立しているから、というのがその理由。たしかに、「庄司和晃と吉本隆明～対話の交差点～」としたほうが、引き締まる気がする。

ところで、吉本さんの『フランス子へ』（講談社2013年3月8日第1刷発行）の「あとがき」にあたるハルノ宵子さんの文章「鍵のない玄関」を読んで驚愕した。吉本さんの亡くなった年の10月、奥さんも亡くなっていたことを初めて知ったからだ。なんとも言いがたい複雑な悲しみに襲われた。

お花を持っていつかこっそりお墓参りに行こうと思っている。

小田 富英

『平地人』とはだれか（2）

—『柳田國男全集』

明治四十二年新年譜から—

「平地人を戦慄せしめよ」の言葉に酔って、正しく戦慄することを忘れてしまっているのではないかという思いから、「平地人」とは誰か」を追究してきました。

私が今作っている「柳田年譜」の、明治41年から43年に至る三年分の年譜事項のなかから探ること、と自分に課題を強いてみたのですが、終えてみてその方法は間違っていなかったと自負しています。

明治43年年譜とともに綴った三回目の連載は、現在刊行中の『遠野学』第2号に発表しました。今年度の年報に一部を発表するつもりです。

この三回の連載を読んでいただいた後、もう一度『遠野物語』の世界に踏み込んでもらえればと思っています。

それにしても、今回改めて強く思ったのは、柳田の生涯こそが「陳勝・呉広」であったということでした。そして、そう確信すればするほど、わが全面研の現代における役割は大なりと発信する必要性も感じています。

尾崎 光弘

3.11 被災地を歩き見て聞く

この文章を書いてみて心に沈殿してきた課題は二つありました。

地震津波にせよ、原発事故にせよ、これらの災害が人々の生活に及ぼす根底にはもといいた場所に帰還することが困難なことに気付かされます。言いかえれば災害によっ

て移動の必然性にどう立ち向かうかという問題です。この向きが一つの生き方を暗示します。これは、人間の生き方の変遷をとらえた柳田國男の世相史の課題になります。

もう一つは、故郷から出て行かざるを得ないという事態は、異郷でいかに生きるか、という問題が生まれることを意味します。

具体的には、かつて故郷にあった時分の人々とのきずなに頼れないということです。(もちろん異郷にそのきずなを持ち込むことも一つの解決策です。) いかえれば、異郷生活での孤立の問題です。「第二の故郷」の検討といってもいいかもしれません。

これをやや一般化すれば、私のような離郷者の異郷での生活の立て方の問題と同じです。

整理しますと、今回の東日本大震災の問題に関心を持ち続ける研究モチーフを、次の二つあげることができます。

- ①災害による人間の移動から、ひとつの時代の世相を描いてみること。
- ②移動先の異郷における生活の在り方から、人間の生き方の問題—孤立と共同(=相互理解=異次元交流)を考えてみること。

以上の課題の前提になっているのは、「どこでも生きられる思想」は、いかに可能かというモチーフに他なりません。

する」ことです。文章の読み方指導の目的は、「書き手の論理」を理解させるだけではなく人間形成の面からも、生き方、考え方など、多大な影響を与えるものです。そのため読解力の指導が大切です。

説明的文章の読みは、読み手にとって新しい知識や情報を獲得し、思考の仕方や表現の論理を学びとったり、さらに新しい考え方や発想に目を開かせることにつながります。もちろん、説明的文章の読解指導の最終目標は、表現に即しながら文章の論理を客観的に読みとるもの、つまり一つの文章の中で、「何が・どういう順序で・どのように説明されているか」ということを、文章に即して正確に理解することでもあります。

物語的文章の指導においても、「言葉」や「表現」にていねいに向き合いながら、そこからそれぞれの場面の移り変わりや情景・描写を想像させることが大切です。そのような指導が、叙述に即しながら正確で豊かな読みの学習につながると思います。

しかし、一方で「読む」という行為は、読み手にとって、あくまでも主体的で個性的なものですから、児童・生徒一人一人の読みの態度や習慣を大切に、それをどう高めていくかということが重要であり、その一つの方法が『推考読み』です。

武田恭宗

『推敲読み』で

論理的思考を高める

— 主観的読み、客観的読み、批評読みの相互作用 —

● 『推考読み』とは

文章を読むという行為は、書き手(筆者)の「文章の論理(内容)を読み取る、理解

徳永 忠雄

『明治大正史世相編』をめぐる

2年前の震災当時水戸にいた、まだ40代の歴史学者の磯田道史は、東日本大震災の被災後に茨城大学から浜松の静岡文化芸術大学に自ら異動しました。それは、東海沖地震や富士山の火山活動など、今後起きる可能性の高い場所での古文書調査に専念するためと言っています。民

俗学と対極にありそうな古文書研究を主とする歴史学者の磯田准教授の研究成果は、『武士の家計簿』で耳目を集めました。古文書の向こうに彼が見ているのは、当時の人々の知恵を絞った生きている姿でした。実際、彼の古文書研究により常陸国でも遠江国でもどのくらいの津波があって、人々が当時どうしたかが分かってきました。

過去に学ぶことを柳田國男は「史心」とくりました。これは、過去を振り返りながら、決して過去に追従することなく、現代にどのように生きればいいのかを考えるまさに生きた歴史学の考え方です。

何年も読み続けてきた『明治大正史世相編』は未来に向けて書かれています。その目途は、歴史を振り返らない日本人や、振り返って過去を踏襲しているばかりの日本人への警鐘の一書であると日々感じています。本稿はそのことを念頭に書き始めた一文で、まだとぼ口です。

---

京極夏彦

遠野物語 remix

(2013 角川学芸出版)

---

書物を読んでどこに本質があるのか、漠然として分からず何度も読み返すことがあるが、本書はすでに、一回読むだけで納得し読み手に鬼気迫る文章になっている。それは、京極夏彦がこの作品の強弱を理解し、

現代に復活させようとしたからだと思う。

本書の注目点は『遠野物語』のオリジナルの構成の再構成だ。テーマ別にシャッフルしたように思う。

序文の扱いも破天荒だ。柳田を主人公に仕立て上げ3つに分解した。柳田が見ている視線の上で京極夏彦が現代の眼で見ているようだ。柳田版の現代語訳という扱いだが淡々としている中で怖さも格別だ。これで遠野物語は21世紀にもう一度甦ったはずである。

ネットで著名の理科教師

## 楠田純一さん登場

楠田純一さんは知る人ぞ知る理科教師です。楠田さんの主宰するホームページ「理科の部屋」は、理科教師の中では超人気だとか。今回はお住まいの兵庫県から庄司先生に会うために上京されました。弁舌なめらかで、理科というややもすれば暗くなりがちなジャンルを白日の下にさらして楽しく展開した功労者でもあるといえます。詳しくは、インターネットでご覧下さい。すごいボリューム、すごいネットワークです。とても60代とは思えません。詳しくは、

## リンク・世相史学研究会

尾崎・徳永主宰の世相史学研究会は、現在『明治大正史 世相史編』の輪読で「家永統の願い」を読み終わりました。

家永統は、封建時代の必定でした。明治・大正の時代に入り、そのことが揺らぎはじめたとき、人々は「家永統」にこだわりました。しかし、それは時代の経済活動という大波に洗われ



ていく。大家族制から家族へと重心が移動する  
日本の生き方を柳田は模索しています。

庄司、植垣、長谷川、小田、向井、尾崎、篠原、  
山田、伊東、楠田、徳永、ほか看護学校の先生方

10名

【当日参加者】

復刻 庄司和晃著作

## 仮説実験授業で育つ思考力

仮説実験授業の場において、子供たちはさまざまな思考の「思考の姿」をあらわす。あたかも「思考の姿」見本市を見るがごときおもむきを呈しているといつてよい。

そこには「とんでもないバカげた考え」の提出があり「読書や耳学問的知識」の動員がある。むろんのことながら「既習事項」適用もある。かと思うと、漠然とした「感じ・思い・カン」の表出もある。

段階的にとらえてみるならば、「原理」適用の高次元にくらいする思考があり、「ヒュ的論理」適用の中次元の様相を帯びる思考もあり、また、時分の「気持ち」や単なる「経験」によつた低次元の思考もある。

なぜかくも様々な段階の思考が現出するのであるか。これは仮説実験授業の特質のなせるわざである。

その特質の中でも、未知のことがらへ予想をひっさげて主体的に立ち向かっていくこと、その際に、自分たちの持っているものを総動員して考えるという態勢を意識的に講じていることは見かえされてよいであろう。ここには、本当のことを知ろうとして囚われることのない自由な立場で積極的に問いかけていくという科学的精神が見事に具体化されている。

次に、子供たちの予想が、ついには正しい一般的な理論・法則・原理を想定したところの仮説に裏打ちされた予想（予言）にまで高められ流、という授業が組織的にくふう・考案されていることも見逃しえない重要な特質である。これによつて日常的で常識的な次元に低迷しがちな「考えること」のせまさ・不自由さが克服され、思考の自由な運動がいやが上にも拡大され、深められているのである。

さらに他人の予想と自分のそれとを対決させるという授業の運営をはかっていること、そこにおいて互いに自分の考えを主張し、説得し合い、よきところは遠慮なく摂取して実験前に予想を変更し、ふに落ちないところはあくまでゆずらず、最終的にはその成否を実験によつて客観的に決着を付けるといういきかたを取っていることも注目されてよい特質のひとつである。



こうした特質を踏まえた授業であるからこそ、前述したような多面的でのびやかな思考力が養成されていくわけである。そしてそのプロセスを通して、物事についてのヨリ正確でヨリ豊富な知識を得る力、すなわち科学的思考力が根太くはぐまれていくのである

「『仮説実験授業と認識の理論』—三段階連続理論の創造—」季節社 1976 よりP45

### **【例会のお知らせ】**

日時：7月6日（土）14：00～

場所：成城学園大学棟3F

内容：年報の読み合わせ、持ち込みレポート

持ち物：2013年版年報